『平家物語』巻十「千手前」の成り立ち

――『吾妻鏡』を窓として――

櫻井陽子

はじめに

南都炎上という大罪を犯した平重衡は木津川畔で処刑される。『平家物語』巻十・十一には重衡の大将軍としての責任と共に、大罪人として裁かれることの自覚、さらには救済への願いが繰り返し綴られる。その中で、「千手前」の章段は風流貴公子としての一面を強く感じさせる点で、いささか別種の趣がある。

本稿では、「千手前」の成り立ちを『吾妻鏡』を用いて考え、『平家物語』が描く重衡の物語を確認していきたい。

第一章　覚一本の「千手前」

まず、語り本系の「千手前」の内容を覚一本によって紹介する。[1]

Ⅰ鎌倉に下った重衡は頼朝と対面し、狩野介宗茂に預けられる。Ⅱ宗茂は頼朝の命令によって、鄭重にもてなし、湯を提供した後、Ⅲ管絃の宴を催し、重衡の深く沈んだ気持ちを和らげる。

Ⅲ1宴では千手前が酌をする。気持ちの乗らない重衡に対し、千手前は①朗詠「羅綺の重衣たる、情けない事を機婦に妬む」を歌う。心を閉ざしている重衡に、千手前は続けて②朗詠「十悪といへども引摂す」と、③今様「極楽ねがはん人はみな、弥陀の名号唱ふべし」を歌う。少し気持ちをとり直した重衡に、Ⅲ2千手前は琴を演奏する。その曲が④「五常楽」とわかった重衡は、「後生楽」と感じると応じて、自分は「往生の急」を弾こうと冗談を言い、琵琶を取り出し、⑤「皇麞急」を弾く。Ⅲ3夜も更けて、千手前は⑥「一樹の陰にやどりあひ、おなじながれをむすぶも、みな是先世のちぎり」という白拍子を歌い、重衡は⑦朗詠「灯闇うしては、数行虞氏之涙」を歌う。

Ⅳ翌朝、千手前の報告を受けた頼朝は満足する。側にいた親能が重衡の優美さをたたえる。

「後生楽」「往生急」からは言語遊戯的側面がうかがえ、楽器の音や朗詠・今様・白拍子の声が聴覚を心地よく刺激し、芸能性が横溢する章段である。重衡と千手の心の通い合いに注目され、重衡の死への絶望感が、ほんのひとときの慰められる場面と評価されている。[2]また、重衡の救済に注目したり、[3]あるいは、「五常楽」「皇麞急」に注目し、管絃講との関連を指摘する論もある。[4]

ところで、この宴の場面は『吾妻鏡』にも記されている。『吾妻鏡』と比較することにより、『平家物語』の作為が

より明確になる。そこで、両作品の分析を行うが、『平家物語』については、語り本系を遡る形態を持つ読み本系諸本を確認しておく必要がある。そこで、読み本系を確認した上で『吾妻鏡』と比較し、『平家物語』における「千手前」の成り立ちと重衡の描写を考えていくこととする。

第二章　読み本系の「千手前」

「千手前」を載せる読み本系は、延慶本巻十―九「重衡卿千手前ト酒盛事」・長門本巻十七の他に、源平盛衰記巻三十九・四部合戦状本巻十などがある。これらの基本的な展開は語り本系と共通しているが、左のような注意すべき相違点もある。

例えば、宴の翌朝、頼朝に近侍していた人物を、語り本系は中原親能とするが、延慶本・長門本・四部本は大江広元とする。盛衰記が語り本系と同様に親能としており、盛衰記には語り本系の影響があることが指摘できる。実は、語り本系の影響については、長門本にもうかがえる。何カ所か、延慶本や盛衰記にはない表現で、語り本系と重なる箇所が見いだせる。長門本独自の語り本系の影響が考えられる。従って、注意を払いながら、三本を対照することとなる。四部本についても随時触れる。

さて、先の朗詠・今様・白拍子については、延慶本・長門本ともに、千手の①②③⑥、重衡の⑦は共通する。しかし楽器演奏曲である④⑤は異なる。そこではじめに、④⑤の記事から読み本系の特徴を考えることとする。左に延慶本本文を引用する。

Ⅲ2　千手琴ヲ取テ、④五常楽ノ急ヲ引澄ス。中将ハ琵琶ヲ取テ掻鳴サル。女シバシハ琴ヲ付ケレドモ、後ニハ拍子アワデ弾止ヌ。夜深行マヽニ、中将閑ニ心ヲ澄テ、⑧廻骨ヲゾ弾レケル。中将、「今生ノ楽ミトコソ観ズベケレ。何事ニテモ今一度承ン」ト被レ仰ケレバ、Ⅲ3千手前「⑥一樹ノ影ニ宿、一河ノ流ヲ汲モ、多生ノ縁猶深シ」ト云事ヲ、カゾヘスマイタリケレバ、（略）

Ⅳ（前半部　略）広元申ケルハ、「［A　略］」。又佐殿、千手ニ問給ケルハ、「中将、終夜琵琶ヲ弾給ツルハ、何ト云楽ニテ有ケルゾ」ト宣ケレバ、「初ハ④五常楽、次ニ⑤皇麞ノ急ニテ候シガ、後ニハ⑧廻骨ト云楽ニテ候」ト申。広元是聞テ、「彼廻骨ヲバ文字ニハ、カバネヲ廻スト書テ候。大国ニハ葬送之時、必ズ用ル楽也。而ニ中将今生ノ栄花尽テ、只今被レ誅給ナムズル事ヲ思給テ、彼異朝ノ例ヲ尋テ、葬送ノ楽ヲ弾レケルコソ哀ナレ」ト申ケレバ、佐殿ヲ始奉テ、聞人涙ヲゾ流シケル。

千手が琴で④「五常楽」を弾き、重衡が琵琶で合わせる。千手は重衡の琵琶に合わせようとするが拍子が合わず、演奏をあきらめる。時が経って、重衡が⑧「廻骨」を弾き、「今生ノ楽ミトコソ観ズベケレ」と述べる。重衡はⅢ1（第六章で引用）で①の朗詠を聞いた時には「重衡今生ハ依二罪業一、被レ捨二三宝一奉リヌ」と言っている。残された生への絶望的な気持ちが、ここでは「今生ノ楽ミ」に転換している。しかし、「廻骨」は翌朝の説明（Ⅳ傍線部）によると、葬送の時に演奏される曲である。「楽ミ」との隔たりは大きい。そして、千手は求められて⑥を歌う。なお、「今生ノ楽ミトコソ観ズベケレ」は延慶本独自の増補の可能性がある。

翌朝の千手と頼朝との対話により、⑤「皇麞急」も弾かれたことが確認できるが、語り本系にあるような「往生」についての言及はない。語り本系が「五常楽」を「後生」と言い換え、「皇麞急」に「往生」を連想させて死後の世

界をうかがう重衡の思いは、延慶本には描かれていない。寧ろ、「廻骨」が葬送の楽であるとの解説が加わることで、まもなくおとずれる処刑という現実に対する重衡の恐れが窺われる。

次に長門本を引用する。

Ⅲ2　其後、此女、ことをひく。中将、ひはをとりてはちをならさる。女、しはしは琴をつけけれとも、しらへあはさりけれは、引と、まりぬ。夜やうやくふけ行ま、に、しつかに物あはれなり。又、「なに事まれ」とのたまひけれは、Ⅲ3女、「⑥一しゆのかけに舎るも」といふ白ひやうしをかそへたり。（略）

Ⅳ（前半部　略）ひろもと、申けるは、「［A　略］」。兵衛佐、又、「ひはにひかれしかくは、なにやらん」とのたまひけれは、千寿、申けるは、「はしめは『⑤わうしやうのきう』にて候しか、後には、『⑧くはいこつ』にて候し」と申けれは、「『くはい骨』とは、文字には『ほねをめくる』とかきて候。大国には、人の死たる薨さうにはかならす此かくをし候也。中将の今の心中、らうえいのふし、ひはのきよく、おりに合てあはれに候」とて、ひろもと、涙をなかす。佐も、さすかかたきなれとも、あはれけにおほされたり。

宴の場面では、演奏した曲名が全く記されていない。翌朝「皇麞急」と「廻骨」が弾かれた旨を千手が報告して初めて、この二曲が演奏されたことがわかる。また、延慶本と同様に、広元の説明によって、「廻骨」の曲名と演奏した意味が明かされている。広元の言葉（傍線部）の後半は延慶本とは異なるものの、重衡の心境を思いやる点は同じである。延慶本・長門本共に、死を目前にした重衡の絶望に強い関心を抱いている。なお、長門本にも、語り本系に記されていた「後生楽」「往生急」への言及がない。

盛衰記は、本文は引用しないが「後生楽」「往生急」に言及し、「廻骨」も延慶本・長門本と同様に演奏する。親能

の解説もある。四部本は重衡の弾いた曲として、「廻骨」のみが紹介され、一生に一度しか弾かない曲で、命終を覚悟しているからであろうとの説明がされる。

読み本系諸本の関心を惹いたのは、主に「廻骨」であり、盛衰記を除けば、「五常楽」と「皇麞急」の二曲は、演奏した雅楽の曲名として記されたと言えよう。

以上、読み本系でも語り本系同様に、千手に朗詠・今様・白拍子を歌わせているが、演奏した曲については異なる叙述となり、特に「廻骨」に重点を置いていること、死が間近に迫っている事態を重衡が実感していることが強調されていることを見て取れた。

次に、⑥⑦について考える。まず、延慶本を引用する。

Ⅲ3　千手前「⑥一樹ノ影ニ宿、一河ノ流ヲ汲モ、多生ノ縁猶深シ」ト云事ヲ、カゾヘスマイタリケレバ、三位心ヲ澄テ「⑦燈暗シテハ数行虞氏ノ涙、夜深テハ四面楚歌ノ声」ト云朗詠ヲゾシ給ケル。是聞テ人々申ケルハ、「西国ニテ如何ニモ可成給一人ノ、離二一門一テ、人シモコソアレ、被二生取一給テ、見馴レヌ軍兵ニ伴テ下給ツラム道通、如何心細ク思給ツラン。雪山ノ鳥ノ、『今日ヤ明日ヤ』ト鳴ラムモ、又蜉蝣ノアダナル露命、思合セラレ給覧ト哀也」ト申テ、鹿野介以下、聞人涙ヲゾ流ケル。中将、鹿野介ニ、「各今ハ帰給へ。夢ミン」ト被レ仰テ、枕ヲ西ニゾ傾ケ給ケル。八音ノ鳥モ鳴渡リ、衣々ニナル暁、千手モイトマ申テ帰ニケリ。

続いて、同じ箇所の長門本を引用する。

Ⅲ3　女、「⑥一しゆのかけに舎るも」といふ白ひやうしをかそへたり。中将、「⑦ともし火くらうしては、すかうくしか涙」といふらうえいを、二三反せられて後、「此世の思出なるへし。いまはとくやすまれよ。我も夢見ん」

とて、もやのまくをひきおろされけれは、ふしともかしこまてまかり出ぬ。中将は、枕をにしにそはたてらる。

此女、御前にふしにけり。その夜、程なくあけゝれは、女おきていつ。

二重傍線部には延慶本独自の、朗詠を聞いた人々の感想が記されている。長門本では、重衡が「此世の思出」と言って、宴を催してくれた感謝の辞とするのに対し、延慶本では、人々が重衡の一人鎌倉に連行された心細さや死が間近であることを思う。まさしく「四面楚歌」の状況に注目している。次いで雪山の鳥や蜉蝣を思い起こして、「廻骨」と重なる、死を目前にした心細さが強調されている。

読み本系は翌朝の広元の解説（Ⅳ）の中で、語り本系は⑦のあとに、左に引用する項羽の話が紹介される。

［A］「アレハ昔大国ニ楚ノ項羽ト申ケル帝、虞氏ト申ミメヨキ后ヲ被二寵愛一候ケリ。漢ノ高祖ト申敵、項羽ヲ襲候ケルニ、馬ノ一日ニ千里ヲ飛ニ乗テ、此虞氏ト倶ニ去ントシケルニ、馬イカゞ思ケム、足ヲ調テハタラカザリケレバ、項羽涙ヲ流テ、『我威勢既ニ尽タリ。今ハ可レ遁方ナシ。敵ノ襲ハムハ事ノ員ナラズ。此虞氏ニ別ナム事コソ悲ケレ』トテ、終夜歎候ケル程ニ、燈ノ闇ク成ルマヽニ、心細テ虞氏涙ヲ流ス。夜深ルマヽニ四面ニ時ヲ作リ候ケルナリ。是ヲ橘相公ガ、

燈暗数行虞氏涙　夜深四面楚歌声

トハ作テ候也。」

長門本も語り本系も本文はほぼ同じである。四面楚歌の状態で項羽に寄り添った虞氏を千手前と重ねた朗詠と読むこととなる。⑥「一樹ノ影ニ宿……」に触発され、千手の心遣いに応えて朗詠をした重衡の思いを汲むことができる。[5]

但し、延慶本が[Ⅲ3]で独自に挿入した二重傍線部の人々の感想は、広元の説明とは異なる。延慶本は重衡に迫り来

る死を強くとらえている。

以上、読み本系は重衡の演奏を、語り本系では触れられていない「廻骨」を中心として展開させ、死を間近にした重衡の思いを描いていく。言語遊戯的な側面への関心はあまりない。その中で、重衡の唯一の朗詠（⑦）は千手の心遣いに応えるものであり、語り本系と共通している。但し、延慶本は、重衡の死とむかい合う心情を強調する点で、独自の様相を見せる。

第三章　『吾妻鏡』の「千手前」

読み本系と語り本系との共通点、相違点を確認したところで、本章では、『吾妻鏡』に沿って宴の展開を確認していく。左に、元暦元年四月二十日条を引用する。

Ⅱ　雨降、終日不休止、本三位中将依武衛御免、有沐浴之儀、

Ⅲ　其後及秉燭之期、称為慰徒然、被遣藤判官代邦通・工藤一臈祐経・幷官女一人〈号千手前〉等於羽林之方、剰被副送竹葉上林已下、羽林殊喜悦、遊興移剋、祐経打鼓歌今様、女房弾琵琶、羽林和横笛、Ⅲ2先吹④五常樂、「為下官、以之可為後生楽」由称之、次吹⑤皇麞急、「謂往生急」、凡於事莫不催興、及夜半女房欲帰、羽林暫抑留之、Ⅲ3与盃及朗詠、「⑦燭暗数行虞氏涙、夜深四面楚歌声」云々、

Ⅳ　其後各帰参御前、武衛令問酒宴次第給、邦通申云、「羽林、云言語、云芸能、尤以優美也、以④五常楽謂後生楽、以⑤皇麞急号往生急、是皆有其由歟、楽名之中、⑧廻忽者元書廻骨、大国葬礼之時調此楽云々、吾為囚人

待被誅条、存在旦暮由之故歟、又女房欲帰之程、猶詠⑦四面楚歌句、彼項羽過呉之事、折節思出歟」之由申之、武衛殊令感事之体給、「依憚世上之聞、吾不臨其座、為恨」之由被仰云々、

Ⅴ　武衛又令持宿衣一領於千手前、更被送遣、其上以祐経「辺鄙士女還可有其興歟、御在国之程可被召置」之由被仰之云々、祐経頻憐羽林、是往年候小松内府之時、常見此羽林之間、于今不忘旧好歟、

『平家物語』との共通性の多さは一目瞭然である。大きく異なる点として、『吾妻鏡』では翌朝ではなく「其後」に、親能でも広元でもなく、邦通が頼朝と会話をすることがある。また、宴では工藤祐経が鼓を打ち今様を歌い、千手が琵琶を弾き、重衡は笛を吹く。曲名や歌詞が披露されるのは重衡のみであり、千手の今様や朗詠は記されていない。

重衡は[Ⅲ2]で④「五常楽」を吹いて「後生楽」と言い換え、⑤「皇麞急」を吹いて「往生急」と言い換え、死後の自分に願いを託す。また、⑧「廻骨」は邦通によって、後で説明がされ、「吾為囚人待被誅条、存在旦暮由之故歟（囚人として処刑される時を待つ自身の命があと僅かであることをわかっているからか）」と、重衡の心情を汲み取る。[Ⅲ3]で唯一記される朗詠（⑦）については、[Ⅳ]で邦通が、女房が帰ろうとした時にふと思い出したのかと言う。千手に虞氏を連想したのだろうが、この説明によって、異郷にあって敵に囲まれた項羽に我が身を重ねていることも察せられる。

「五常楽」も「皇麞急」も「四面楚歌」も、重衡自身の演奏と朗詠であり、千手は琵琶を演奏するのみであったことには注意したい。「四面楚歌」には千手の存在を意識している様子も窺えるが、「後生」「往生」への言い換え、そして「廻骨」の解説が記されることによって、死に対峙している重衡の現在が記される。囚人として死を待つ辛さ、死後への願い、敵陣に一人いる孤独といった、重衡の様々な心情に焦点があてられている。

「羽林殊喜悦、遊興移剋」と、重衡は頼朝らの饗応に喜んで時間を過ごしたと記されるが、この場面から溢れ出てくるのは、寧ろ、絶望的な状況に直面している重衡の心情である。「喜悦」と記される表情が見えたとすれば、思いがけなくも厚いもてなしを受けたことへの感謝の念の表れであろう。

第四章　『吾妻鏡』と『平家物語』

次に、重衡の関東下向関係記事まで拡げて『吾妻鏡』と『平家物語』の関係を考える。両書の先後関係については多くの研究がある。[6] 但し、合戦譚や文書が中心で、「千手前」についてはあまり触れられていない。数少ない指摘では、『吾妻鏡』もしくは、『吾妻鏡』が使用した資料を『平家物語』が用いたとされている。[7] 本章でも同様の結論を導くことになるが、重衡に向ける『平家物語』の関心を確認するために、諸本の検討を交えて考えていくこととする。

(1)　重衡の関東到着・頼朝との対面

まず、該当する『吾妻鏡』を引用し、次に『平家物語』諸本との対照を示す。

○三位中将重衡卿今日出京赴関東、梶原平三景時相具之、是武衛依令申請給也、（三月十日条）

○武衛進発伊豆国給、是為覧野出鹿也、下河辺庄司行平・同四郎政義・新田四郎忠常・愛甲三郎季隆・戸崎右馬允国延等可為御前之射手由被定云々、（三月十八日条）

○去夜着御北条、（三月二十日条）

○三品羽林着伊豆国府、境節武衛令坐北条給之間、景時以専使伺子細、早相具可参当所之由被仰、仍伴参、但明旦可遂面謁之由被仰羽林云々、（三月二十七日条）

○（第五章に引用（三月二十八日条））

○自北条御帰着鎌倉、藤九郎盛長献盃酒、入夜於北面屋有此儀、召行平・政義・忠常・季隆・国延等於御前、給鹿皮〈各三枚〉、去比於伊豆国所射取之鹿歟、（四月一日条）

○本三位中将自伊豆国来着鎌倉、仍武衛点墹内屋一宇、被招入之、狩野介一族・郎従等毎夜十人令結番守護之、（四月八日条）

	『吾妻鏡』	延慶本	長門本	盛衰記	四部本
重衡到着	3・27 伊豆国府	八章段 3・26 伊豆	3・28 大庭→鎌倉	3・23 伊豆着	
頼朝と対面	3・28 伊豆北条	伊豆	鎌倉	3・26 鎌倉	3・27 鎌倉
移動	4・8 鎌倉着			3・27 鎌倉	3・28 鎌倉
宴	4・20 鎌倉	九章段 伊豆	3・29 鎌倉	晦日 鎌倉	3・28 鎌倉
頼朝から贈物	当日	二十章段 3・27 鎌倉着 翌日	4・1	×	×

『吾妻鏡』によれば、頼朝は三月十八日に野出の鹿を見るために、射手を引き連れて伊豆に向かい、翌日夜に北条に到着し、十日ほど滞在し、四月一日に鎌倉に戻っている。重衡との対面はその間の出来事である。重衡は二十七日に伊豆国府に到着してすぐに北条に呼ばれ、翌朝頼朝と対面する。

頼朝が伊豆で狩をしていた時に、偶然重衡の下向に遭遇し、重衡を呼び寄せたのであろうか。重衡の東国下向は頼朝の命令によるものである（三月十日条）。重衡が伊豆に到着する日程はおおよそ把握していただろう。そして、重衡との対面の翌日、頼朝は北条を出発している。頼朝は重衡に会うために、狩を口実として北条まで出向き、重衡を待っていたと推測できよう。『吾妻鏡』の記事を追う限り、北条での対面に不自然な展開はない。

『平家物語』諸本では、延慶本以外は鎌倉で頼朝と対面する。延慶本巻十一―八「重衡卿関東へ下給事」は、伊豆での対面を次のように記す。

Ⅰ　日数漸積行バ、廿六日ノ夕晩ニハ、中将伊豆ノ国府ヘゾ付給フ。折節兵衛佐殿ハ伊豆ニ狩シテオワシケレバ、梶原、事ノ由ヲ申入タリケレバ、（略　一行は屋敷に入る）。

鎌倉殿、比企ノ藤四郎能員ヲ御使ニテ被レ申ケルハ、「無二左右一可レ入二見参一候ヘドモ、此程焼野ヲ狩テ候ヘバ、ホコリ多クカ、リテ候之間、イカケ仕テ、見参ニ可レ入候。加様ニ御下向コソ神妙ニ候ヘ。但雪メ父之恥一、（略）」

重衡は伊豆国府（三島）に到着する。頼朝が狩で伊豆にいたことも『吾妻鏡』と共通している。対面場所が国府であるかのように読めるところは少々異なる。次に盛衰記では、

Ⅰ　同二十三日ニハ、伊豆国府ニゾ著給フ。兵衛佐殿、折節伊豆ノ奥野ノ焼狩トテ、狩場ニオハシケリ。此由カクト申タリケレバ、北条ヘ奉レ入ト也。翌ノ日ハ北条ヘ奉レ具、（略　頼朝は）一法房ヲ使ニテ、「是マデ御下向、

返々難レ有覚へ侍リ。此間焼山狩仕テ、狩場ノ灰ナド懸リテ見苦ク候ヘバ、静ニ可レ入二見参一」ト宣棄テ、鎌倉へ入給ケリ。二十五日ニ梶原平三、三位中将奉二相具一、同二十六日ニ鎌倉ヘゾ入ニケル。（傍線は延慶本・盛衰記共通部分）。

とある。盛衰記も延慶本・『吾妻鏡』と同様に、重衡は伊豆国府に到着し、頼朝も狩のために伊豆に逗留中である。重衡が伊豆に到着した日が異なるが、これは盛衰記が頼朝と対面する地に到着した日付を、延慶本に記されているような二十六日のままとするための操作であろう。

延慶本も盛衰記もそれぞれ不自然な文脈を抱えている。延慶本は、狩をして埃にまみれているので湯浴みをしてから対面を、と使いに言わせているものの、続けて重衡との対面に移り、大名小名が居並んで聞いていたと記される。盛衰記は、重衡を北条に呼びつけておきながら、狩の灰がかかっているからと言って、会わずに鎌倉に戻り、後日鎌倉で対面する。これらの不自然さは、読み本系共通祖本の段階の内容が、『吾妻鏡』のように頼朝が狩を名目として伊豆に滞在していたことと、伊豆（おそらく北条）で頼朝と対面したとするものであり、その展開に対して、それぞれが（整序されたとは言い難いが）改編を試みたと考えれば、納得できるものである。

長門本は、

左には松山かゝとそひへて、松ふく風もさく〳〵たり。右には海上まむ〳〵として、きしうつ浪もれき〳〵たり。恋せはやせぬへし恋せすはありぬへしとうたひはしめ給ひし、あしからの関も過ぬれは、こよろきの磯、さかみ河、八松や、とかみ河原、みこしかさきをもうち過て、かまくらへも下つき給ひにけり。廿八日、大はといふところに、ひつしの剋はかりにつきて、そこにて、立ゑほしにしやう衣をきせまいらせて、しつかにくたし奉る。

「これよりかまくらへ一里」といひあひけり。つねの道より人しけし。中将、なにとなくむなさはきしてそおはしける。扨、程なく、かくと申入たりければ、門外にて粧あり。左右の御手をむねの内におさめまいらせてけり。門はしら二本はかりにて、むねもあけすとひらもたてす。

とある。鎌倉で対面をするが、鎌倉に到着したとしながら、続けて二十八日の大庭到着を記し、そこから一里ほど先の鎌倉に入ったと記す点は、やや不自然である。傍線部分は延慶本・盛衰記などと共通する。網かけ部分はほぼ覚一本（一方系）と共通している。長門本は、鎌倉での対面とすべく、伊豆ではなく大庭まで直行させた。そのいっぽうで、一方系を用いて地名を列挙して鎌倉入りの一文を加えたと推測される。長門本にも、重衡の到着地を鎌倉に改編しようとして不手際が重なったことが窺える。

このような読み本系の状況からすれば、二人が鎌倉で対面するとした延慶本以外の諸本の展開は後出のものと考えられる。続いて描かれていく、多くの武士に囲まれた中で頼朝と対峙する心細さを抱きながら、しかし堂々と対応する重衡の凛とした姿は、三島や北条ではなく、鎌倉でこそふさわしい。

語り本系のうち、屋代本や八坂系では「明神ウタヒ始給ケル足柄山打越テ、急カヌ旅ト思ヘトモ、日数漸重ナレハ、鎌倉ヘコソ入給へ」（屋代本による）とあるように、足柄から鎌倉までの地名の列挙はない。一方系には、先の長門本の網かけ部分のように、鎌倉までの地名が列挙される。重衡が伊豆ではなく直接鎌倉に入ると改編したのは語り本系であり、一方系はそこに地名を加えたと推察される。

（2） 宴の日付と場所

『吾妻鏡』では、重衡が鎌倉に移って十日以上経ってから湯浴みが許され、宴が催される。長門本では頼朝との対面の翌日に、盛衰記は翌々日に、湯浴みと宴が行われている。延慶本・四部本・語り本系では同日に行われている。多少の揺れはあるものの、『平家物語』は頼朝との対面から宴までを一連の出来事として描いている。

延慶本のみが、伊豆で宴が行われたとするが、重衡と頼朝との対面を伊豆とした延長線上で生まれた設定と考えられる。但し、これは、重衡の鎌倉移送記事に影響を与える。『吾妻鏡』では宴に続いて、長門本でも宴の記事に続けて四月一日（宴の翌日に相当）に、頼朝が重衡に衣を与えたと記す（Ⅴ）。延慶本はかなり離れた二十章段になって、宴の翌日の二十七日に重衡が鎌倉に到着し、その翌日に頼朝から衣を送ったと記す。延慶本は、宴までを伊豆での出来事としたために、記す場がなくなってしまった重衡の鎌倉移送を、大量の維盛記事の後で記し添えたと推測される。なお、伊豆から鎌倉までは一日では行けない。二十六日夜に宴を催して夜明けまで寝て、二十七日に鎌倉に到着するという日程には無理がある。

（3） 宴の場面

宴の場面については先に触れたが、ここでは『吾妻鏡』との関係を考える上で、先には触れなかった事柄について考える。それは、『吾妻鏡』では「五常楽」と「皇麞急」を二曲とも、重衡が「笛」で演奏していることである。笛や琴が主旋律を奏でることによって、曲名も明らかになる。すると、『吾妻鏡』の叙述は自然である。

いっぽう、延慶本・長門本・盛衰記では、千手が琴を弾いて重衡が琵琶を合わせるが、千手は途中で弾き止める。

その後、重衡は琵琶を弾き続けたようである。後に広元が、重衡が弾いた琵琶の曲名を答えるところから、そのように理解できる。しかし、雅楽の合奏では、琵琶は伴奏楽器として使われる。琵琶の演奏だけで曲名を言い当てるのは困難であろう。これは、重衡が笛を吹いたとする『吾妻鏡』にあるような記事を琵琶に代えたことによって生まれた齟齬ではなかろうか。

（4）『吾妻鏡』と語り本系の接近

読み本系では「後生楽」「往生急」への言い換えにはあまり関心がもたれていないが、語り本系では、『吾妻鏡』と同様に、「後生楽」と「往生急」が強調されており、語り本系と『吾妻鏡』との近さがうかがわれる。

また、『吾妻鏡』文治四年（1188）四月二十二、二十五日条に千手の記事があり、千手の消息が知られる。

○入夜御台所御方女房〈号千手前〉於御前絶入、則蘇生、日来無差病云々、及暁、依仰出里亭云々、（四月二十二日条）

○今暁千手前卒去〈年廿四〉、其性大穏便、人々所惜也、前故三位中将重衡参向之時、不慮相馴、彼上洛之後、恋慕之思朝夕不休、憶念之所積、若為発病之因歟之由、人疑之云々、（四月二十五日条）

読み本系には一切触れられていないが、語り本系には千手の後日譚が記される。

○其ヨリシテソ千手前ハ中々ニ思ヒ深クハ成ニケル。（屋代本による。八坂系も同様）

○千手前は中々物思ひの種とや成りにけん。やがて様をかへ、濃き墨染に窶果てて、信濃国善光寺に行澄まして、彼の後世菩提を弔けるぞ哀れなる。（流布本による）

○千手前は、中〳〵にもの思ひのたねとや成にけん。されば中将南都へわたされて、きられ給ひぬと聞えしかば、やがてさまをかへ、こき墨染にやつれはて、信濃国善光寺におこなひすまして、彼後世菩提をとぶらひ、わが身もつゐに、往生の素懐をとげけるとぞ聞えし。（覚一本による。京師本・百二十句本も同様）

あるいは、語り本系は改めて、『吾妻鏡』もしくは、重衡関係資料を参考にしたかとも疑われる。

（5）小括

以上、重衡関係話について、『吾妻鏡』と『平家物語』の共通点、相違点について考えてきた。基本的には先学の指摘するように、『吾妻鏡』編者の手元には、重衡関係のある程度のまとまった記録が残されていたと考えられる。『平家物語』も同様である。しかも、『平家物語』を遡る形態を『吾妻鏡』に見ることができた。しかしながら、『平家物語』が『吾妻鏡』を原拠としたと言うわけではない。なお、読み本系から語り本系へとは必ずしも直線的にはつながらない点もある。

『吾妻鏡』と『平家物語』との関係を右のように捉えると、宴の前に描かれる湯浴みの場面についても、その事実を一言述べるだけの『吾妻鏡』のような記事をもとに、『平家物語』が大きく膨らませたと考えることができる。

『吾妻鏡』には記されていない宴における千手前の朗詠・今様・白拍子も、『平家物語』の創作と考えられる。また、宴に先立って行われた頼朝との対面の場面で、『平家物語』には『吾妻鏡』にはない頼朝の言葉が含まれている。これも『平家物語』の創作と考えられる。第五・六章では、これらの記事から、『平家物語』の作為を考えていきたい。

第五章　頼朝との対話

まず、重衡と頼朝との対話について考える。左に延慶本を引用する。第四章の引用に続く場面である。

Ⅰ「（前略）加様ニ御下向コソ神妙ニ候へ。a但雪ニ父之恥一、b奉レ休二君之御鬱一ヲ思立候シ上ハ、c奉レ亡二平家一事ハ案ノ内ニテ候シカドモ、d目当リ可二見参一トコソ不二思寄一候シカ。e今ハ大臣殿ニモ見参シ候ヌトコソ覚候へ。f抑焼二南都一給シ事ハ、太政入道殿ノ仰ニテ候シカ、期ニ臨タル御計ニテ候ケルカ、以外ノ罪業ニコソ」ト被レ申ケレバ、三位中将是ヲ聞給テ涙ヲ拭ヒ、「g昔ヨリ源平両家朝家ノ御守ニテ、帝王ノ宮仕ヲ仕ル。近来源氏ノ運傾カレ候シ事、今更事新ク非レ可レ申、人皆知レル事ニテ候。其勧賞ヲ初トシテ、平家世中ヲ平ル間、一天ノ君ノ御外戚トシテ、h一族ノ昇進八十余人、廿ケ年之間楽三栄ヘ、無二申量一。i今又運尽ヌレバ、重衡召人ニテ参ル。此勧賞ニテ稔給ワム事無レ疑。其レニ取テ、帝王ノ御敵ヲ討タル者ハ、七代マデ朝恩失セズト申事、極タル僻事也。目当リ、故入道ハ法皇ノ御為ニハ申セバ愚也、御命ニ代奉ル事モ度々也。サレドモ僅ニ其身一代ノ幸ニテ、子孫加様ニ罷成ベシヤ。一門運尽テ、都ヲ迷出候シ後ハ、骸ヲ山野ニサラシ、名ヲ後代ニ留ントコソ存候シカ、是マデ可レ参トハ存ゼザリキ。此モ先世ノ宿業ニコソ。『殷ノ紂ハ夏ノ桀ニ囚ハレ、文王ハ傀里ニ籠ラル』ト云文有。上古又如レ此、況於二末代一乎。（j弓矢とるならひ、かたきのためにとらはれて命をうしなふ事）全非レ恥。k御芳恩ニハ、利ク可レ召レ頸ヲ」トゾ宣ケル。景時已下ノ大名小名、御前ニ並居タリケルガ、「此中将殿ハ、イタイケシタル口聞哉」ト、各讃奉テ、皆涙ヲゾ流ケル。「此人ハ名ヲ流シタル大将軍也。無二左右一不レ可レ奉レ切。南都大衆申旨有」ト兵衛佐宣テ、「宗茂是へ」ト有ケレバ、梃ナル僧召付ク。（（　）部分は長門本による。盛衰記

も類同。延慶本の脱落か）

次いで『吾妻鏡』三月二十八日条を引用する。

被請本三位中将〈藍摺直垂、引立烏帽子〉於廊令謁給、仰云、「b且為奉慰君御憤、a且為雪父尸骸之恥、c試企石橋合戦以降、令対治平氏之逆乱如指掌、d仍及面拝、不屑眉目也、e此上者、謁槐門之事、亦無所疑歟」者、羽林答申曰、「g源平為天下警衛之処、頃年之間、当家独守朝廷也、h許昇進者八十餘輩、思其繁栄者二十余年也、i而今運命之依縮、為囚人参入上者、不能左右、j携弓馬之者、為敵被虜、強非恥辱、k早可被処斬罪」云々、無繊芥之憚奉問答、聞者莫不感、其後被召預狩野介云々、

延慶本の二重傍線部は『平家物語』諸本には同様の記述があるが、『吾妻鏡』にはない。『平家物語』は、平家の朝廷に対する忠節を堂々と主張し、現在の状況への悲憤を述べる重衡を描き出している。しかし、それ以前はほぼ共通している。その中で注意したいのが、『吾妻鏡』にfがないことである。fは頼朝からの問いである。『平家物語』の重衡の返答は前述したように堂々たるものであるが、fの問いに対応する答えはない。その点不完全ではあるが、『平家物語』は重衡の南都炎上に対する罪を改めて思い起こさせるためにfを加えたと考えることができる。重衡の言葉を聞いた頼朝の反応にも、南都の大衆への言及がある。

なお、語り本系の重衡の答えの冒頭は以下のとおりである。

まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず、重衡が愚意の発起にもあらず。衆徒の悪行をしづめむがためにまかりむかッて候し程に、不慮に伽藍滅亡に及び候し事、力及ばぬ次第也。

続いて、読み本系と同様の内容が語られていく。語り本系においては、頼朝の問いに対する答えが用意され、しかも、

重衡は自身の発意ではないと主張する。この主張は、語り本系・読み本系の巻十「内裏女房」、「戒文」相当箇所でも繰り返されている。語り本系では更に巻十一「重衡被斬」でも同様の発言を繰り返し、重衡の主張を強調していく。

『平家物語』は、敵の武士たちに囲まれながらも堂々と対応する重衡を描き出し、しかも、南都炎上を頼朝に改めて語らせることによって、重衡の犯した大罪に注目させる。そして、湯浴み、宴の場へと移っていく。

第六章　千手前の声

最後に、『吾妻鏡』にはない千手の歌った朗詠と今様を考える。まず延慶本によって、第二章で引用した[Ⅲ2]に先んじる部分を引用する。

[Ⅲ1]　其夜ハ雨打降タリケルニ、鹿野介家子郎等引具テ、酒持テ参タリ。千手ノ前モ琵琶、琴持テ参ル。三位ハ倚臥給タリケルガ、起直テオハス。酒ヲ勧奉ニ、盃七分ニ請給フ。鹿野介申ケルハ、「兵衛佐殿ヨリ、『能々モテナシ進セヨ』ト云蒙レ仰テ候之間、旅所ニテ候ヘドモ、千手前何事ニテモ一声申テ進セヨ」ト申ケレバ、「①羅綺ノ重衣タル、無レ情機婦ニ妬ミ、管絃ノ長曲ニアル、不レ終事ヲ伶人ニ嗔」ト云朗詠ヲシタリ。三位中将被レ仰ケルハ、「重衡今生ハ依二罪業一、被レ捨二三宝一奉リヌ。罪業軽ミヌベキ事ナラバ、嬉奉ラム」ト被レ申ケレバ、千手ノ前「②雖二十悪一猶引接ス」ト云朗詠ヲシテ、「③極楽ヘ参ラン人ハ皆」ト云今様三反歌澄ヒタリ。其時三位盃ヲ傾ケ給。

[Ⅲ2]　千手琴ヲ取テ、④五常楽ノ急ヲ引澄ス。（以下略）

①は『和漢朗詠集』（下・管絃・466）所載の「羅綺の重衣為る、情無きことを機婦に妬む、管絃の長曲に在る、閑へざることを伶人に怒る」（薄く軽い衣を重く感じ、これを織った機織りの女を憎む。管絃の曲が長いので、早く終えないことを楽人に対して怒る）である。千手は、頼朝の命を受けて重衡をもてなそうとしてこの朗詠を選んだ。

読み本系では、重衡は湯浴みの時に、明日の処刑を予測している。そして長門本・盛衰記は出家を頼朝に願い、即座に拒絶される。延慶本は出家の願いについての記述はなく、明日の処刑について頼朝が否定するという独自の記述となっている。語り本系では処刑の予測についての記述はなく、出家の願いと頼朝による拒絶が記される。

その遣り取りを仲介した千手は、重衡の失意を十分に理解している。その千手が選んだ朗詠は現在の状況とはかけ離れた内容であった。しかし、長門本・盛衰記・語り本系では、この朗詠を歌う者は北野天神が守ってくれると誓ったと続く。延慶本にその文言はないが、『平家物語』としては、せめて、天神の誓いを思い起こさせる朗詠を共に歌うことによって、重衡にも天神の加護があるようにとの願いが籠められていたと理解できる。

ところが、続く「重衡今生ハ依二罪業一、被レ捨二三宝一奉リヌ」では、自分は南都を炎上させた罪により、今生では救われない存在であると、自らの絶望的な状況を口にする。重衡の罪業は頼朝の問いにも示されていた。この言葉は諸本ともに類似して記されており、千手の思いは重衡の心をほぐすには至らなかったと了解される。

しかし、重衡はすぐに、やはり諸本同様に、「罪業軽ミヌベキ事ナラバ、嫡奉ラム」と続ける。死が目前に迫り、出家も許されない身ではあるが、それでもなお、少しでも罪が軽くなることならば、と、千手の提案を受け入れる。

②「雖二十悪一猶引接ス」も『和漢朗詠集』（下・仏事・591）所載の「十悪と雖も猶ほ引摂す、疾風の雲霧を披くよりも甚し、一念と雖も必ず感応す、之れを巨海の涓露を納るるに喩ふ」（たとえ十悪を犯した者でも阿弥陀仏は極楽

浄土に引き取って下さる。一回の念仏であっても、必ず感応して往生を叶えて下さる）の一節である。千手は、どのような大罪人でも、阿弥陀仏は救済の手をさしのべてくれると歌う。重衡の願いを掬い取ってくれると、阿弥陀の本願を歌う。重衡の心境を察した千手は、即座に重衡に寄り添う朗詠を歌う[8]。

③「極楽へ参ラン人ハ皆」は、「極楽へ参ラン人ハ皆弥陀ノ名号唱フベシ」という今様である。②に続けて、阿弥陀に救済されるためには、弥陀の名号を唱えよという。重衡の絶望的な心情を少しでも軽くし、重衡の口にした「罪業軽ミヌベキ事ナラバ」に応じようと、阿弥陀の名号を奨める。

これらが、『平家物語』が新たに描き出した、宴席における千手の歌である。千手は、犯した罪の重さに喘ぎ、死を目前に控えて絶望している重衡を慰め、阿弥陀の救いを歌うことによって、重衡の気持ちをほぐしていく。

この阿弥陀の救いに関して思い起こされるのは、法然の説経である。捕虜となって京に戻された重衡は出家も許されなかった。僅かに許されたのが法然との対面であった。重衡は法然に向かって自分の行為を告白し、懺悔し、なお、救済の道はないかと問う。法然は念仏を唱えることによって救われると説く。その展開と表現は、『平家物語』の千手と重衡との遣り取りと対応しているのではないだろうか。少々長くなるが、左に延慶本巻十―五「重衡卿法然上人ニ相奉事」より、必要部分を引用する。

「重衡ガ後生ヲイカヾシ候ベキ。（略）何ナル行ヲ修シテ、一業助ルベシトモ覚ヘ候ハズ。心憂コソ候ヘ。倩ラ一生ノ所行ヲ思知リ、屢先世ノ業因ヲ案ジ連ケ候ニ、罪業ハ須弥ヨリモ高ク、善業ハ微塵計モ蓄候ハズ。角テ空ク命終リ候ナバ、火血刀ノ苦果、敢テ疑候マジ。願ハ慈悲ヲ施シ、兼テハ憐ミヲ垂給テ、あカヽル悪人ノ後生可レ助方法候ハヾ、示給リ候バヤ」ト被レ申タリケレバ、上人涙ニ咽テ、シバシハ物モ宣ハズ。

良久有テ、「誠ニ難レ受人身ヲ受テ、空ク三途ニ還御坐ム事ハ、悲テモ猶悲カルベシ。然バ今厭ヒ穢土一、願ヒ浄土一、翻シ悪心ヲ一、発シ善心一給ハム事ハ、三世諸仏モ定テ随喜シ給ラム。出離之道雖レ区ト、末法濁乱ノ機ニハ、称名ヲ以テ為レ勝タリト。土ヲ分テ九品一ニ、行ヲ縮メ六字一ニテ、い十悪五逆モ廻向スレバ往生ス。十悪五逆罪滅往生ト釈ルガ故ニ。一念十念モ心ヲ到セバ正因トナル。一念弥陀仏即滅無量罪ト説ガ故。う専称名号至西方ト釈シテ、専名号ヲ称ズレバ、西方ニ至ル。念々称名常懺悔ト述テ、念々ニ御名ヲ唱レバ懺悔スル也ト教タリ。利剣即是弥陀号恃メバ、魔縁不ニ近付一。一声称念罪皆除念ズレバ、罪皆除コルト見ヘタリ。浄土宗ノ至要、存レ略ルニ、大略是ヲ為ニ肝心一ト。但往生ノ得不得ハ依ニ信心之有無一ニ。只深ク信ジテ努々不レ可ニ生レ疑ヲ給一フ。若深ク此教ヘヲ信ジテ、行住坐臥時所諸縁ヲ間ハズ、三業四儀ニヲイテ、心念口称ヲ不レ忘レシテ、命終ヲ為レテ期ト、此苦域ノ界ヲ出テ、彼ノ不退ノ土ニ往生シ給ハム事、何ノ疑カ有ム」ト教化シ給ケレバ、

い「十悪五逆モ廻向スレバ往生ス」は②「雖ニ十悪一猶引接ス」に類似し、続く「一念十念モ心ヲ到セバ正因トナル」は、『和漢朗詠集』の「一念と雖も必ず感応す」と響き合う。いには阿弥陀からの救済は直接的には触れられていないが、②では明確に、重衡に阿弥陀の救いの手がさしのべられる。(9)

う「専称名号至西方ト釈シテ、専名号ヲ称ズレバ、西方ニ至ル」は③「極楽へ参ラン人ハ皆弥陀ノ名号唱フベシ」に共通する表現を見いだすことができる。

『平家物語』が加えた千手の歌のうち②③は、法然の話を繰り返したものである。すると①は、少しでも罪業が軽くなるならばという重衡の願いを引き出すために必要とされた朗詠でもあったと言えよう。重衡は救済へ近づく方法を、あ「カ、ル悪人ノ後生可レ助方法候ハヾ、示給リ候バヤ」と法然に懇願した。①の朗詠を聞いた時の重衡の反応「重

衡今生ハ依二罪業一、被レ捨二三宝一奉リヌ。罪業軽ミヌベキ事ナラバ、嬀奉ラム」は、あと等質とは言えないが、救済を求める重衡の心中を語らせ、それに答えて阿弥陀の救済が語られ歌われる点で通い合う。

重衡を慰める千手の歌声は、「戒文」の再現であり、重衡と法然の対話を引き継ぐものと言えよう。経典を散りばめた、男声による硬い説経の次に、音楽的な抑揚を用いて、柔らかく、また平易な言葉で女声が説き、優しくリフレインしながら重衡の往生への願いの実現に近づいていく。

前章で指摘した、頼朝が発した南都炎上に関する質問（f）は重衡の南都炎上の罪を今一度思い起こさせるために、『平家物語』が加えたものであった。読み本系の湯浴みの場面では、重衡が明日処刑かと怯え、叶わない出家を願う言葉が加えられている。そして、宴の場面では、『吾妻鏡』と同様に、間近に迫る死を見つめる重衡の姿が色濃く描き出されていた。特に延慶本ではその点が強調されている（語り本系ではその色彩は薄められているが）。そして、『平家物語』は独自に千手前の朗詠・今様・白拍子を加える。重衡の罪と救済への願いが随所に編み込まれていく。

おわりに

『平家物語』作者が手元にあった資料をどのように加工し再編成していくか、諸本がどのように変奏していくのか、その様相の一端を、『吾妻鏡』を媒介として辿っていった。

『平家物語』が重衡の罪を描き、そこからの救済への道を描こうとしている――これは既に言い尽くされている『平家物語』の構想の一つである。重衡を描く中で、芸能色を濃厚に押し出した点でいささか異色とも思われる「千手前」

も例外ではない。死を前にした重衡に寄り添い、法然との対話を平易に繰り返すことで、重衡の救済への道を示している。

注

（1）語り本系の代表的本文として、一方系の覚一本を用いる。屋代本・八坂系などには細部に違いはあるものの、大差は無い。

（2）たとえば、池田敬子氏は流布本によって、「ここには生硬な仏教語はなく、後生楽と五常楽の、往生の急と皇麞の急の懸詞の楽しみ・情緒的今様であり、言葉は宗教的雰囲気を漂わせる教養・芸能の世界のものである」（『軍記と室町物語』〈清文堂 2001〉Ⅰ〈初出は 1977・3〉）、佐伯真一氏は「重衡の風雅を描いて最も著名な「千手前」」（『平家物語遡源』〈若草書房 1996〉第三部第五章〈初出は 1985・9〉）、松尾葦江氏は「「千手前」で演奏される朗詠や今様、管弦の曲は、重衡と千手の心の交流をその時間的変化と共に暗示する機能を果たしている」（『軍記物語原論』笠間書院 2008）など。但し、村上学氏は延慶本の不整合やちぐはぐさを指摘する（「延慶本瞥見―重衡物語を通じて―」〈「国語と国文学」85巻11号 2008・11〉）。

（3）たとえば、横井孝氏は「千手前」に限らず、「重衡は、女たちの涙によって罪業が洗い流されてゆくのだ。女たちの涙によって浄化、鎮魂される物語が重衡の物語なのだ」（水原一編『古文学の流域』新典社 1996・4）と指摘する。

（4）由井恭子氏は「五常楽」「皇麞急」が、「講や法会の場で歌舞されたもの」であることから、千手が「重衡の極楽往生を願う一種の管絃講をしている」（「『平家物語』千手前について―管絃講との関わりから―」〈「国文学試論」14号 2000・1〉）とする。

（5）語り本系諸本では、屋代本・八坂系が、⑥「一樹の陰にやどりあひ……」と⑦朗詠「灯闇うしては、……」の順序が逆転している。読み本系も含めてみると、これらの逆転は後出と考えられる。

（6）『吾妻鏡』が源平盛衰記を利用しているとする八代国治氏『吾妻鏡の研究』（吉川弘文館 1913）を始めとして、共通の資料を用いているとする五味文彦氏『吾妻鏡の方法 事実と神話にみる中世』（吉川弘文館 1990）他。最近では、藪本勝治氏は以仁王事件に関して、「（『吾妻鏡』）の記事が『平家物語』の語句を利用しながら、恣意的に文脈を組み替えつつ独自の構想に従って編集されている」（『『吾妻鏡』の合戦叙述と〈歴史〉構築』序章（和泉書院 2022）と指摘し、『吾妻鏡』の諸本研究を進捗させている高橋秀樹氏は精力的に発言を続け、同事件についても、「『平家物語』と『吾妻鏡』との共通する原史料の存在を想定

する方が自然であろう」（「『吾妻鏡』について実証的に考える」〈「軍記と語り物」59号　2023・3〉）と指摘するなど、意見が対立している。

（7）夙に佐々木八郎氏は「千手前」について語り本系（流布本）と『吾妻鏡』を比較し、「『平家物語』の方が、『吾妻鏡』の記事を活用し」（『平家物語講説』早稲田大学出版部　1950）と結論づけ、日下力氏は「『平家』は、（狩野宗茂あたりが後世に伝えたものに拠った可能性のある『吾妻鏡』）に手を加え」（『平家物語転読』笠間書院　2006）と推測する。坂井孝一氏は東国の情報といった観点から五点をあげて考察し、「東国の事情を最もよく反映しているのは『吾妻鏡』であり、「覚一本」「屋代本」「延慶本」はそれに及ばないが、「延慶本」は『吾妻鏡』もしくはその原資料と何らかの交渉があった可能性を感じさせる、との結論が得られると考える」（「『平家物語』の生成と東国―「重衡・千手譚」を素材として―」『平家物語の多角的研究　屋代本を拠点として』〈ひつじ書房　2011・11〉）とする。

（8）原田敦史氏は、重衡記事に現れる女性と、この場面では特に②を中心として、宗教的特色と女性たちの役割を結びつけ、「それら二つがわかちがたく結びついて構想されていたのではないか」と指摘する（『平家物語の表現世界　諸本の生成と流動』〈花鳥社　2022〉第二章第九節〈初出は2019・9〉）。

（9）法然の言葉に法然義は反映されていない、法然は重衡に救済の手をさしのべてはいないのではないかという論や、それに対する反論も出され、かつて論争が繰り広げられた。最近、源健一郎氏は「『平家物語』における〈法然〉の位置づけ」（「同志社国文学」98・2023・5）で、その経緯をまとめている。氏は、その上で新しく、「顕密仏教的価値観のもと、悪人重衡にふさわしい方便劣行たる念仏勧進の担い手として位置づけられている」とする説を提示している。

［引用テキスト］

『校訂延慶本平家物語　巻十』（汲古書院）、『長門本平家物語　四』（勉誠出版）、『源平盛衰記（七）』（三弥井書店）、『平家物語　下』（覚一本。岩波書店　新日本古典文学大系）、『屋代本高野本対照平家物語』（屋代本。新典社）、『平家物語』（流布本。桜楓社）、『新訂吾妻鏡　一』（和泉書院。他本により校訂した部分がある）、『和漢朗詠集／新撰朗詠集』（明治書院　和歌文学大系。書き下し文を引用した）

（さくらい・ようこ／本学教授）